論　　文

# 自閉的特徴がみられる子どもと彼らにとっての対象について

京都大学大学院教育学研究科
博士後期課程２回生　　松　本　優　馬

## On The Children In The Autistic States And The Objects

MATSUMOTO, Yuma

キーワード：自閉、三つ組の障害、対象関係論
Key Words：Autism，Triad of Impairments, Object Relations Theory

### 1.　はじめに

ある子どもが親に連れられてセラピストのもとにやってきて、その子どもについて「集団になじめないこと」、「冗談が通じないこと」、「一人遊びが好きだったこと」などを親が語ったとする。すでに多くの人々はそういった特徴が医学的な診断において「自閉症スペクトラム障害」の特徴として記述されていることを知っている。場合によっては、より明確に、「自閉症スペクトラム障害」という医学的な診断を伴って子どもが紹介されてくることも少なくない。

子どもがこのような記述や医学的診断と共に来談するという、現代ではよく起こるであろうこういった場面には、その子どもについて理解する上で、立ち止まって考えるべきいくつかの問題が含まれている。一つ目の問題は、このような記述が子どもを客観的に観察したものとしては確かであるとしても、それがどの程度子どもの体験を捉えられているのだろうかということである。子どもが医学的な診断という一つの枠組みの中に収められたとき、子どもに対する親や我々の理解は前進しているのだろうか。もしも我々が子どもの目線からその世界を想像しようとしたとすれば、このような記述をこえて、どのようなものが見えてくるのであろうか。

二つ目の問題は、「子どもの特徴」としてのこのような記述によって、見落とされているものが何であるかということである。どのような子どもも、彼らを取り巻く人々の中に存在する、生きた人間である。多くの場合で、子どもは困っている親や、学校からの勧めによって心理臨床の場にやってくる。子どもがそういった大きな力動の一部であり、影響を与え合っているということは忘れてはならない観点である。「子どもの特徴」としての記述はこういった力動まで含めることはできない。また、このことは、「親の特徴」についても同様である。我々がそのような場面で出会う親に対して抱く印象も、単に「親の特徴」としての記述されるべきでない。もし我々が子どもの親に対して、子どもに対する関わりの薄さや、不安の高さを感じたときには、それまでに積み重ねられている家族の力動からどのように理解すること

ができるだろうか。

第一の問題と第二の問題に深く関連したことあるが、第三の問題として、子どもたちにとって、対象がどのように体験されているのか、もしくは体験されていないのかということがあげられる。この問題は、子どもの体験している世界について検討するとき（第一の問題）にも、子どもと周囲の人々との間で生じている関係性、力動について検討するとき（第二の問題）にも重要な視点となる。

本論の目的は以上の問題について、関係性の視点から検討することである。この検討を以下の道筋で進めていく。はじめに子どもに見られる「自閉的特徴」について明確にし、上記の問題を提起する意義について改めて述べ、それを論じるために関係性の視点が必要であることについて説明する。次に関係性の視点について、特にアン・アルヴァレズ Alvarez, A.の理論について考察を行う。それを踏まえ、上記の問題について論じ、最後に子どもの体験している世界を想像することを困難にする要因について考察を行う。

## 2. 自閉的特徴について

現代において子どもに対して「自閉的」という言葉が使われるのは、以下に述べるような「自閉的特徴」が少なからず見受けられ、医学的な診断においては「自閉症スペクトラム障害（自閉スペクトラム症)」というスペクトラムのどこかに位置づけられる子どもを指していると考えられる。

自閉症スペクトラム障害という概念は、1970 年代から 80 年代にかけて、カナー型の自閉症を一連の自閉性障害というより広いスペクトラムの一部分とする考えに端を発し、ローナ・ウィング Wing, L. によって提唱されたものである。

Wing, L. & Gould, J.（1979）は自閉症と小児期に見られる学習困難や言語障害について調べるために、程度を問わず何らかの身体または学習の障害があるか、行動異常がある 15 歳未満の児童に調査を行った。この調査を通して典型的なカナー型自閉症の診断基準に適合しないものの自閉的な行動特徴を持つ多くの子どもたちを見出した。これらの子どもたちに見いだされたのは、「人との相互交渉、コミュニケーションおよび想像力の発達が共通して欠けていたり障害されていたりすること」（Wing, 1996, p.30）と、反復的な活動や興味のパターンがあることである。本論において「自閉的特徴」というときにはこれらの特徴を指すものとする。Wing（1996）はこの「三つ組」と呼んだ特徴と、反復的活動の根底にある類似点について以下のように述べている。

> この三つ組の根底には、より基本的な精神機能の障害があることに疑問を差しはさむ余地はありません。過去の記憶のなかや今起きていることからあらゆる情報をまとめあげ、経験したことの意味を理解し、将来何が起こりうるのかを予測して計画を立てる能力が欠けているように思われます。自閉性障害をもつ人は、世の中の意味を理解できず経験から学ぶことが困難です。（Wing, 1996, p.30）

何が冒されているといっても、他人への関心の欠如こそが決定的なのです。これに伴うのが、他人に

は取るに足らない無意味と思えるような特定の物や体験に対する特有な魅了のされ方です。（Wing, 1996, p.31）

Wing が述べていることから読み取れるように、社会的相互交渉、コミュニケーション、想像力のいずれをとっても、そこには重要な前提として、対象の存在がある。これらの能力は、まず対象が存在し、それに関心が向けられ、相互作用が繰り返される中で絡み合いながら成長するものである。このことを踏まえれば、仮に対象への関心が子どもに欠如しているということがあれば、これらの障害にも説明がつくかもしれない。

しかしながらここで生じる問題は、「関心」自体が相互作用を含むものとして考えられるということである。すなわち、関心は子どもが対象へ向けるだけでなく、対象によって引き出されるものでもあり、対象から子どもへと向けられるものでもある。このような関係性の側面がある「関心」が観察されないことが、子どもの側の欠如としてのみ記述されることは、現象の全体像を描いていることにはならないのではないだろうか。そしてこのことは、子どもの障害として記述される多くの自閉的特徴にあてはまると考えられる。生きた人間である彼らはどのような世界を体験しており、どのような環境に生きているのか。そこには対象は存在するのか。存在するとすれば、どのような形で存在するのか。ここに先に述べた三つの問題を問う意義がある。

子どもの生きている世界をより正確に知ろうとしたときには、子どもの世界を子どもと対象の双方から見る、関係性の視点が必要である。Wing（1996）は「経験から学ぶことが困難」であると記述したが、まずは彼らがどのように経験しているのか、あるいは経験されていないのかを知るところから始めなくてはならないだろう。もしも我々が子どものことを理解したと思って、このようなことに本当に関心を払わなくなったときに、子どもたちの他者への関心は本当に失われてしまっているのかもしれない。それは時に、子どもにとって重要な発達の機会や、内的な世界が豊かになる瞬間への気付きを妨げてしまう危険性を含んでいる。

本論では次に、何かを経験し、考えるという心の働きが関係性の中でいかに培われていくかについて、ビオン Bion, W. R. のモデルから見ていく。そしてその中で、自閉的な子どもがどのように記述されうるか、Alvarez の理論をもとに考察を行っていく。

## 3. アン・アルヴァレズの理論から見る「考えること」の発達

人間が何かを経験し、それについて考え、消化するという一連の心の働きが、関係性の中でどのように生じるものであるかについて明確に述べたのは Bion である。はじめに Bion (1962) が「考えること」という心の働きについて体系的に述べていることを以下に引用する。

考えることは，2 つの主要な精神発達がうまく行った結果に基づくとみなすと便利である。第 1 は，考え（thoughts）の発達である。それらは，それらを取り扱うための装置を要する。したがって第 2 の発達は，私が暫定的に，考えること（thinking）と命名するこの装置の発達である。繰り返すが，

考えることは，考えを取り扱うために生まれねばならない。（Bion, 1962, p.117）

「考え」は，それらの発達史の性質に応じて，前概念（pre-conceptions），概念（conceptions）あるいは考え（thoughts），最後に，名辞（concepts）に分類できるかもしれない。したがって名辞は，名前を授けられ，固定された概念や考えである。概念は，前概念が現実と接合することで始動する。……（中略）……精神分析的には，乳幼児が乳房への期待に相応した生得的傾向を有しているという理論が，モデル提供のために使えるかもしれない。前概念がそれに近似する現実と接触するに到った時の精神的結果が概念である。（Bion, 1962, p.117）

私は，前概念が欲求不満と番うことに，「考え」という用語を限定する。私が提案するモデルは，乳幼児の乳房への期待が，充足させられるための無い乳房が手に入ることの現実感（realization）と番っているというものである。この番っている状態が，無い乳房（no-breast）あるいは内部にある「不在の（absent）」乳房として体験される。次の段階は，乳幼児の欲求不満に耐える能力に左右される。特に，欲求不満を回避するか，それとも修正するかの決断に左右される。

欲求不満に耐える能力が十分ならば、内部にある「無い乳房」は考えとなり、それを「考える」ための装置が発達する。（Bion, 1962, p.117-118）

このように Bion の理論においては、「考え」は考えることの産物とはみなされておらず、「考え」自体の発達を前提として、考えるための心の機能の発達が生じると考えられている。Bion によれば「考え」の発達の根底に、生得的な期待や先験的知識とみなされる前概念が想定され、考えや考えることの発達に向けて、前概念の現実化（それに近似する現実との接触するに到ること）へと向かおうとする動きが生得的に生じるものと理解される。そして、その現実化に伴って生じる欲求不満が「考える」ための装置の発達につながる点が重視されていることがわかる。

この過程について考えたとき、いくつかの前提が織り込まれていることに気づく。すなわち乳幼児の側には、現実や対象の存在を感知する準備性があるということ、そしてそれらが受け取られることによって経験可能な状態であることという前提である。

自閉症児や深刻な剥奪を受けた子どもに対する精神分析を行った Alvarez, A.の理論は、こういった前提が不確かな子どもとの間で行われる作業について多くのことを記述しており、Bion の理論の拡張を提起している。Alvarez（1992）は言葉と行動に遅れが見られ、非常に引きこもることで紹介されてきた子ども、ロビーとのセラピーにおいて生じたことについて、以下のように述べている。

私は，何週間も，何か月も，ロビーから発され投影されるものを求めながら座っていましたが，それらが現実のものとなることはありませんでした。私は，包容モデルが有効だと分かった他の患者に対するよりも，より積極的に動かねばならないという欲求と切迫感を感じ始めていました。（Alvarez, 1992, p.75）

「包容モデル」（コンテイニングのモデル）は先に述べた Bion の理論に基づくモデルを指している。このモデルにおいて子どもにとって耐えられないものは母親へと投影され、母親の中に生じるものとなり、今度は母親によって、子どもが耐えられる形で戻しつつあると感じさせる仕方で対応される（Bion, 1962）。この過程は子どもを欲求不満から「考えること」への発達へと導く。一方、Alvarez が記述しているのは、生きているという感覚が感じられず、投影されるものすらない状態の子どもとの間で生じたことだと理解できる。こういった子どもたちに対して抱く切迫感と、子どもから投影されたものとの違いについて Alvarez はさらに以下のように述べている。

切迫感，ぞっとする感じ，何とかしないとという気持ちは，心が病み，解体され，死にかかっているようなある段階に対しては適切な反応かもしれません。患者が自分の状態の深刻さを知る助けとなるためには，治療者はこの切迫感を，自分のバランスや考える力を失うことなく感じなければならないのかもしれません。慢性的な精神疾患や慢性的な抑うつや無気力の場合には，たとえそれが子どもであっても，抑うつや無気力や狂気になるそもそもの動機といったようなぜいたくな問いが扱われるよりはるか以前に，慢性性そのものに手をつけねばなりません。（Alvarez, 1992, p.79）

深くひきこもった患者について感じる懸念のいくらかは，部分的には，患者が自分では感じることのできない絶望を強力に投影していることへの反応かもしれません。しかし、そういった懸念は、患者のなかのもっと重篤な部分，放棄された何か，コミュニケーションを送ることすら全くできなくなっている何かに対する反応でもありえます。……（中略）……このような状況のこの側面に対する治療者の反応は，いわば，想像という積極的な行為によって，治療者自身のうちに呼び覚まされるのかもしれません。（Alvarez, 1992, p.81）

Alvarez（1992）はこのような緊急処置の必要性は、「人間的なものを見、耳を傾けるという受容する感覚」（p.82）によってまず同定される必要があると述べている。ここで Alvarez が述べているのは、子どもの世界に生きているという感覚がほとんど存在せず、セラピストとの間で荒涼としたものが広がっているときに、そこに感じられる切迫感は、セラピストの生きている感覚によって捉えられる子どもの緊急性のサインであるということだと考えられる。このような水準においては、我々はただ子どもから投げかけられるものを待っているだけでは不十分であり、自分自身の生きた感覚が失われないよう留まりながら、子どもの世界を積極的に想像し、彼らに呼びかける必要があると考えられる。このようにして遠く離れた子どもを「人間社会の一員として取り戻すこと（reclaim）」とも表現される過程を Alvarez は「再生（reclamation）」と呼んでいる（Alvarez, 1992, p.76-77）。ではセラピストの積極的な働きかけは、どのような点で彼らの心の発達を促進するものであろうか。Alvarez は以下のように述べている。

ある種の患者たちには，対象が生きていることに気づいてもらうために，自分自身と対象との違いと分離性について学ぶのを援助する必要がある一方で，別の種類の患者たちは対象の利用可能性や親密

性や類似性を学ばなければならないということです。対象が現れたり戻ったりすることは，いなくなることと同じくらい刺激的で思考誘発的なものになり得ます。特に，もし患者が，対象が戻ってくることよりもいなくなることの方により慣れているなら特にそうです。思考を誘発するものは，確かに対象のもつ注意を引く力（noticeability）に違いありません。（Alvarez, 1992, p.89）

このように Alvarez は、対象が通常不在である子どもにとっては、彼らの関心を引く新しい対象が存在するということ自体が考える機能の発達を促進するものと考え、それまでの考えることの発達の理論に拡張を加えた。Alvarez は自閉的な傾向が強い子どもに関して、対人接触への希求や応答性が当たり前に備わっているとみなされないことを指摘しつつ、「しかし，注意深く観察すれば，他の人々に対するそうした感受性の証拠が，間接的に示されるかもしれません。……（中略）……それぞれの子どもに特有の手がかりを十分, 研究し, 注意を向けることなくしては, 解読は不可能です。」(Alvarez, 1992, p.112) と述べている。Alvarez が出会ったロビーは、「他者に関心を引かれない（undrawn）」（Alvarez, 1999, p.71）ことを特徴とする一つのサブグループであることは踏まえておく必要があるが、生きている感覚の薄さや、そこにセラピストが感じる切迫感は、「自閉的」とみなされる子どもにおいて少なからず確認できる本質的なものではないだろうか。Alvarez が述べているのは、このような子どもたちとのセラピーにおいては、子どものかすかなサインや反応にはより一層の注意が払われる必要があることと、それだけではなく、「新しい体験へと初めて覚醒するのは，それが彼ら自身のうちに起こりつつある時ではなく，むしろ誰か他者のうちに起こっていると見た時であることを観察した」（Alvarez, 1992, p.110）とあるように、セラピスト自身の心の動きが重要な動力源となることがあるということだと考えられる。

## 4. アルヴァレズの理論に関する考察

ここまで Alvarez の理論に基づき、考えるための心の機能の発達において、対象の存在が発見され、「再生」が生じることの重要性について見てきた。先に述べたように、我々は非常に注意深い観察と、自分自身が感じていることの感知を通して、子どもの世界を想像することができる。ここでまず、第一の問題と第三の問題に取り組むことができる。いわゆる「自閉的」なものとして客観的に記述されているものを、Alvarez の視点から関係性の文脈の中でとらえ直した時、そこに見えてくるのは自己と対象双方の、生きているという感覚の薄さと言うことができるかもしれない。より視野を広げると、彼らにとっては現実や世界自体が、関心を引くほどの希望や信頼を持ち合わせていないのかもしれない。それは意図的に対象や世界を信頼しないということとは区別される必要があると考えられる。現実の中には関心を引くものがあり、希望や信頼といったものが存在しているということ自体が彼らにとっては体験されていない可能性がある。このような観点が客観的な記述と異なる点は、Alvarez の記述から理解されるように、確かに彼らにとって対象はかすかにしか存在しないかもしれないが、対象の前概念は存在しており、それは十分なきっかけがあれば現実化されうるという点にある。

彼らとの関係性において生じる切迫感や、退屈さ、いらだちといった感情が重要であるのは、それがセラピストの中に生きているという感覚があり、彼らの世界を想像するからこそ生じ、感知されうるも

のだからではないだろうか。そういった意味で、これらの感情は必然的に生じるものと考えることができる。しかしながら、同時にこういった感情を抱くことは、彼らを支援するものにとって耐え難いことでもある。Alvarez はロビーとのセラピーの中で「私は、徐々に、彼がいかに心の死に近いところにいるのかと、パニックにも近い強力な焦燥感に圧倒される自分に気づくようになっていった。しかし、またあるときには、私はこのようなことを簡単に忘れてしまい、ロビーと同じように、危険にも心を穏やかにどこかへ追いやってしまうこともあった」（Alvarez, 1999, p.78）と述べている。このようにセラピストが抱くネガティブな感情が抑圧されたり、心自体をどこかにやってしまったりする危険性は常に潜んでいる。それらは、セラピスト自身の生きている感覚を放棄することにつながっており、それによって子どもたちが対象を発見できない状態が遷延化することに手を貸してしまう可能性があると考えられる。

おそらく多くのセラピストが体験しているように、これらの感情を感知することや、子どもの関心を引く瞬間とその手段を見つけることを実際に行うことははるかに難しい。これらのことを難しくしている要因はなんであろうか。耐えがたい感情が消失することはないだろうが、このことについて考えておくことは、セラピストが関係性の中で生き残るうえで非常に重要なことであろう。

## 5.　想像することを困難にするもの

以下ではこれまで述べてきたことを踏まえ、セラピストが子どもの世界を想像することを困難にするものとして、三つの事柄を取り上げる。一つ目はセラピストが子どもと生きた関わりを持てていないと感じる中で生じる逆転移を処理することの難しさである。二つ目は生じている困難の原因を「子どもの障害」として捉えてしまうことである。三つ目は子どもとの間で進展が見られないことを、より複雑な形で、子どもの家族に帰属させてしまう可能性である。

①逆転移について

子どもが遊びや言葉を使って伝えようとしていることに耳を傾けることは、どのようなセラピーにおいても根幹となる姿勢である。したがってセラピストにとって、クライエントの遊びや話に退屈を感じたり嫌悪感を抱いたりすることによって関心を保てなくなることは、それが正常な反応と言われたとしても二重に苦しいことであろう。自閉的特徴を持つ子どもとのセラピーでは、セラピストの言葉が届かず、生きた存在として映っていないように感じることや、子どもが同じ行為を儀式のように延々と繰り返すことによって、セラピストの中にネガティブな感情が喚起されやすいと考えられる。

こういった困難な場面で可能性の一つとして考えるべきことは、子どものコミュニケーションのサインを見逃していないかということであろう。Alvarez は「波長に合わせる」（Alvarez, 1999; 2012）という言葉で、子どもの発達段階を考慮したコミュニケーションの重要性に言及している。子どもがその年齢に見合ったコミュニケーション方法を用いていないことによって、コミュニケーションができないとみなされることは避けられなければならない。我々は言葉を用いてコミュニケーションを取ることに慣れているが、それだけでなく、リズムやトーンまでもが子どもとの間でコミュニケーションのツールと

なりうる。Alvarez（1992, 1999）は常同的にテーブルを手で擦り、ぐるぐる歩き回る子どもとのセッションの中で、Alvarez が視線を向けているかどうかや、リズミカルに足をならすことによって彼の動きや活気が変化した例を挙げている。この例に示されているように、セラピストがどのような場所で生きた対象として子どもと出会うことができるのかということは、入念に探索されなければならないと考えられる。

もし子どもと出会える場所が見つからず、その子どももセラピスト自身もどこにもいないように感じられる場合、セラピスト自身の生きた感覚を頼りに積極的に働きかけることの重要性は高まると考えられる。このとき慎重な検討が必要となるのは、セラピストが自身の感じていることに基づいて積極的に行動することが、セラピストの行動化（アクティングアウト）となってはいないかという点である。たとえセラピストの感じているものが、自身の生きている感覚が抱く通常の反応であったとしても、その感情を爆発させる形で子どもに提示することは有害であることは間違いない。こういった爆発的な形で表現されることを防ぐためには、セラピストが自身に生じているネガティブな感情をモニターしているだけでなく、それを子どもとの関係性という文脈から生じているものとしてたどることが重要だと考えられる。Alvarez はロビーに対する退屈や嫌悪感について検討する中で、そこに生じていたことについて以下のように述べている。

> 彼は，私には同じ古い主題であったが彼には言語的な相互的自慰の一形態であったものについて話す興奮を私が共有しているという，かなり妄想的でありながら固定された考えを持っていました。私は，彼のある種の言い回しを繰り返さず，自分自身ものごとを新鮮な仕方で表現するようにこころがけることを学ばなければなりませんでした。（このような仕事には，自分自身の心の自閉的な怠惰さを絶えずスーパービジョンすることが要求されます。）（Alvarez, 1992, p.292）

Alvarez によるこの記述からは、彼女がロビーの空想世界において興奮を共有するものとして存在していたことが理解される。このように、それまでのセラピストの存在が子どもにとってどのように体験されているのか想像することは、そこで生じているネガティブな感情が生じている文脈を理解する上で重要である。セラピストが子どもとの関係性の中にすっかり絡まっていて、それについて検討することが難しい時にはスーパービジョンや同僚とのディスカッションを活用するべきだと考えられる。

②「子どもの障害」に帰属させることについて

もしセラピストが子どもへの働きかけに対して手ごたえを感じないことが続いた時、その原因を「子どもの障害」に帰属させるという誘惑にかられるかもしれない。このような考えがセラピストに浮かんだ時には特に、子どもとの関係性の中で生じていることと、自身が感じていることについて注意深く吟味する必要があると考えられる。なぜならばそれらは、セラピストが彼らに抱いているネガティブな感情を否認していることを、間接的な形で示している可能性があるからである。

すでに述べてきた通り、「自閉的」とみなされる子どもたちの体験している世界は、関係性の中に位置づけられて初めて理解することができると考えられる。「社会性の障害」や「コミュニケーションの障害」、

「常同行為」、「こだわり」といった捉えの枠組みは、生じている問題を「子どもの障害」として記述したものであり、そこで生じていることの全体像が含まれてはいない。このような概念に子どもが収められてしまうと、我々はその子どもを理解したつもりになってしまい、本当の意味で彼らに出会うことが難しくなる。それは子どもたちにとっては、彼らの中にある対象の前概念が現実化する機会を遠ざけることにつながる可能性がある。

ここで述べていることは、子どもがもともと持つ特徴の存在を否定しているわけではない。しかしながら、特にひきこもった状態が慢性化しているときには、彼らがひきこもっている原因の記述と、ひきこもっている状態の記述とは区別して考える必要がある。Alvarez は以下のように述べている。

> なぜひきこもるのかという理由に向けられた解釈は，ひきこもりの程度という危険な事実を無視しているかもしれません。それらは，また，患者がひきこもってしまっている広大で未知の心的空間の距離を定め, 把握し, そしてそれを乗り越えるという重大な問題を無視しています。(Alvarez, 1992, p.80)

Alvarez が述べていることを現代において言い換えるのであれば、子どもの状態を「子どもの障害」の症状として理解したように思うことは、子どもが対象からどの程度遠ざかっていて、どのような世界にいるのかを想像するセラピストの心の働きを妨げてしまうことだと言えるのではないだろうか。

③家族の中の子どもという視点について

セラピーに進展が見られなかったり、セラピストがネガティブな感情に耐えられなかったりして、想像することが困難な時、それは子どもの家族を責めるという、より複雑な形で現れるかもしれない。あるいはすでにそのような動きが家族の中で生じていて、その悪者探しにセラピストが巻き込まれている場合もあるだろう。このような場合には、冒頭で第二の問題として提起した視点が重要と考えられる。

多くの場合、子どもたちは親に連れられてセラピーの場にやってくる。来談の動機に子どもに対する親の困りが含まれていることは珍しくない。当然のことではあるが、子どもは生まれてからそれまでの年月を家族と共に過ごしており、その長い経験の中で蓄積されてきた家族力動というものがある。このことに注意しておくことは、家族の誰か（親でも子どもでも）が悪者扱いされている事態について留まって考えたり、それを防いだりするうえで必要不可欠なことである。リード Reid, S.は自閉症の子どもを持つ家族の困難を明確に描いている。

> 子どもが自分に対してまったく興味がなく、また、自分が子どもの行動に何の影響もインパクトも与えないと感じることは、親にとっては本当に絶望的なことである。このような子どもと家族の人生がどんなふうに始まっていたとしても、我々のところに紹介されてくるときには、たいていの親はトラウマを抱え、落ち込み、しばしば希望を失い、人間としての価値が傷つけられたようにさえ感じている。自閉症の子どもは、身体的生存のためだけに自分たちに頼っているのだ、と家族に思わせてしまっていることもある。ある母親は「もし私が明日いなくなっても、息子がそれに本当に気がつくとは

思えない」と語った。（Reid, 1999, p.25）

Reid による記述は、親が自信を喪失すること、関わりへの関心を失くすこと、子どもの成長がイメージできないことなど、様々な困難を容易に想像させる。本論において子どもとセラピストとの関係性の中で生じるものとして記述した困難やネガティブな感情は、当然、子どもの家族にも長年にわたって体験されているものと考えてよいだろう。そうした中で形成されてきた家族力動の中で、子どもたちは生きているのである。そうしたことを踏まえれば、一見、子どもの発達を促進せず、自閉的な状態を固定するような要因が親に見られたとしても、それがすぐに関わりの薄い親や過保護の親とみなされるべきではない。子どもの体験世界を想像することと並んで重要なことは、それまで子どもと家族がどのようにして生きてきたのかを理解することである。子どもを支援することによって、家族全体の力動が改善される場合もあるだろう。もしそれ以上の悪循環が生じているならば、時に家族に対する支援も積極的に検討されるべきだと考えられる。

## 7. まとめと展望

ここまで、Alvarez の理論をもとにして、関係性の視点から自閉的特徴が見られる子どもの体験世界について考察してきた。そしてセラピストが子どもの世界を想像することを困難にするいくつかの要因についても考察を行った。「自閉」や「障害」といった言葉は、関わることの難しさや心が豊かになることの難しさといったものを連想させる強力な力を持っている。しかしながら我々が向かい合うのは、「障害」ではなく、生きた人間であるということは心に留めておかねばならない。課題として残された事柄は、「自閉的特徴」と一言で言っても、子どもの在り方は多種多様であるという点である。何がその子どもにとってのニードであり、何が対象を発見する契機となりうるのか。どのような場所でその子どもと出会うことができるのか。これらのことは、個別の事例の中で詳細に吟味される必要がある。また本論では議論の対象を「自閉的特徴」が見られる子どもに限定したが、関係性の観点から見れば、生きている感覚がかすかな状態というものが外的要因に大きく影響されて生じる場合もある。Alvarez（2012）は虐待やネグレクトを受けた子どもや、サイコティックな状態にある子どもについても共通する心の状態を見出している。子どもは「障害があるから」、あるいは「虐待されたから」という理由で支援が必要なのではない。彼らの心が発達するために何が必要かということは、そういった外的枠組みからではなく、子どもとの間で織りなされることから検討される必要があると考えられる。このような多種多様な子どもたちに対して本論で述べたことが実践の中でどのように生かされうるのか示すことを今後の課題としたい。

## 引用文献

Alvarez, A. (1992). Live Company: Psychoanalytic Psychotherapy with Autistic, Boderline, Deprived and Abused Children, London: Routledge.　（アルヴァレズ, A.　千原雅代・中川純子・平井正三（訳）(2002).　こころの再生を求めて　―ポスト・クライン派による子どもの心理療法―　岩崎学術出版社）

Alvarez, A. (1999). 'Addressing the deficit: developmentally informed psychotherapy with passive, "undrawn" children.' In Alvarez, A. & Reid, S. (eds) Autism and Personality: Findings from the Tavistock Autism Workshop, London: Routledge.　（鵜飼奈津子・廣澤愛子・岩佐美奈子（訳）(2006).「欠陥に挑む―受身的で'他者に関心を引かれない'子どもたちに対する発達研究に裏打ちされた心理療法」　倉光修（監訳）自閉症とパーソナリティ　創元社）

Alvarez, A. (2012). The Thinking Heart: Three Levels of Psychoanalytic Therapy with Disturbed　Children, London: Routledge.（アルヴァレズ, A.　脇谷順子（監訳）(2017).　子どものこころの生きた理解に向けて　―発達障害・被虐待児との心理療法の３つのレベル―　金剛出版）

Bion, W. R. (1962).　'A theory of thinking' In Bion, W. R. (1967) Second Thoughts: Selected Papers on Psychoanalysis, London: Heinmann.　（中川慎一郎（訳）(2007).「考えることに関する理論」　松木邦裕（監訳）　再考 : 精神病の精神分析論　金剛出版）

Reid, S. (1999). 'The assessment of the child with autism: a family perspective.'　In Alvarez, A. & Reid, S. (eds) Autism and Personality: Findings from the Tavistock Autism Workshop, London: Routledge.　（鵜飼奈津子・廣澤愛子・岩佐美奈子（訳）(2006).「自閉症の子どものアセスメント―家族の視点から」　倉光修（監訳）自閉症とパーソナリティ　創元社）

Wing, L. & Gould, J. (1979). 'Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: epidemiology and classification' *Journal of Autism and Childhoood Schizophrenia*, **9**, 11-29.

Wing, L. (1996). THE AUTISTIC SPECTRUM　A guide for parents and professionals, London: Constable.　（ウィング, L.　久保紘章・佐々木正美・清水康夫（監訳）(1998)．自閉症スペクトル　親と専門家のためのガイドブック　東京書籍）